唐末五代の代北におけるソグド系突厥と沙陀

森　部　豊

はじめに
一　代北とソグド系突厥
二　「六胡州」と「六州胡」
三　代北における沙陀の勢力伸張とソグド系突厥
（一）沙陀の東遷
（二）黄巣亂時における沙陀の動向
（三）代北におけるソグド系突厥
おわりに

はじめに

沙陀は唐末の黄巣の亂（八七五―八八四）により中國が混亂に陥った時、唐朝側について亂鎮壓に參加し、それをきっかけとして勢力が伸張した。この時、沙陀を率いていた李克用は、もとは朱邪（朱耶）姓を冠する沙陀族であった。李克用の父である朱邪赤心が龐勛の亂（八六六―八六九）の鎮壓に功績があり唐朝から李姓と國昌の名を賜ったのである。その後、沙陀は五代を切り開いた朱全忠の後梁（九〇七―九二三）を破り、後唐（九二三―九三六）を建國した。さらに同じ沙陀から後晉・後漢・後周の三王朝が誕生する。五代初期に後梁が存續していた間も、沙陀は唐朝の正朔を奉じて河東に獨立した

勢力を保持していたから、五代史は事實上、沙陀の興亡の歴史とみることも可能である。

沙陀は、もともと現在の甘粛省から新疆ウイグル自治區にまたがる地域に居住していた種族で、西突厥の別部の處月の種であると言われる。このことは沙陀自身が突厥と同系統であると認識していた事實の反映であろう。しかし、沙陀の勢力はそれほど強大なものではなく、吐蕃に壓迫され、唐の元和三年（八〇八）に現在のオルドスへ移住し、その翌年には、さらに山西省北部の大同盆地へ移住するにいたる。この遊牧系の種族が、黄巣の亂をきっかけに突如として擡頭し、五代時期に四王朝を建國するにいたったのであるが、その勢力伸張の要因や中國史上で演じたその大きな役割などについては、いまだ十分に論じつくされているとはいいがたい。

本稿は、後唐を建國するにいたった沙陀の勢力伸張の要因を、唐後半期に華北において活動していたソグド系突厥との關係を通じて論じるものである。ソグド系突厥とは、本論において説明するが、もともと東突厥に從屬し、文化的あるいは血縁的に突厥の影響を強く受けたソグド人を指すものとする。ソグド人は、漢文史料において安や康といった彼ら特有の漢字一字姓（ソグド姓）[1]を冠して現れる。さらに漢文史料中ではソグド姓同士で婚姻關係を結んでいる者が多數確認でき、中國移住後のソグド人たちが互いに婚姻關係を維持していたことが明らかとなる。[2]これらの事實は、漢文史料に見える中國移住後のソグド人の多くが自らの出自をソグドと意識し、容易には「漢化」しなかったのではという推測を抱かしめるのである。一方、ソグド姓を冠しながら騎射技術に優れ、武人として活躍する事例を複數見ることもできる。ソグド人は一般にはソグド商人のイメージが強いが、唐・五代の中國では、軍人や政治家として活躍していたソグド人も存在していたのである。

沙陀勢力下に多くのソグド人が存在していた事實は、小野川一九四二や、それとは別個に考證したPulleyblank一九五二がつとに指摘しており、近年では徐庭雲一九九三、王義康一九九七の研究もみられる。またソグド系突厥そのものについては、森部一九九七が唐代河朔三鎮の一つ、魏博の節度使となった何弘敬の墓誌銘に譯注をほどこし、藩鎮魏博とソ

グド系突厥の關係を論じ、森部一九九八は、唐代の河朔三鎮で活動したソグド系突厥の活動を明らかにした。また森部二〇〇一では五代時期の沙陀に仕えたソグド系突厥二人とそのうち一人の夫人の墓誌銘の譯注を通じて、後唐・後晉でのソグド系突厥の存在を明らかにした。最新のソグド研究であるVaissière二〇〇二においても、Les milieux turco-sogdiensの概念をもって安史の亂までのソグド系突厥の役割を論じている。一方、沙陀そのものの專論はそれほど多くはなく、岡崎一九四五・同一九四八・同一九五一、Yang一九四七、傅樂成一九六五、室永一九七一a・同一九七一b・同一九七四・同一九七五、徐庭雲一九八七、王義康一九九五、樊文禮一九九七・同二〇〇〇・同二〇〇二、蔡家藝二〇〇一、および墓誌銘を利用した沙陀研究である石見二〇〇〇、森部・石見二〇〇三を數えるにとどまっている。

以上の先行研究の整理を通じて、從來編纂史料中心に進められて來たソグド系突厥および沙陀研究に對し、近年では墓誌銘を中心とした石刻史料を利用した研究が進展していることが指摘できよう。本稿は以上の先行研究の成果に基づき、近年公刊され、新たに利用が可能となった唐末・五代時期のソグド系突厥および沙陀に關する墓誌銘を利用し、次の二つの問題點について論じていきたい。第一に、沙陀勢力下で活動していたソグド系突厥の系統の問題を明確に論じる。第二に沙陀勢力下におけるソグド系突厥の存在形態を明らかにし、そしてソグド系突厥と九世紀後半の沙陀の急激な勢力伸張が密接な關係にあったことを論じるものである。

一　代北とソグド系突厥

唐末の黄巣の亂前後に河東道（ほぼ現在の山西省と一致）北部の地域（代北）を中心にソグド系突厥と沙陀の活動が活發となる。まず、河東道北部の概況を簡略に述べていきたい（**図1**參照）。唐代の河東道北部には、雲州・朔州・蔚州・代州・嵐州・忻州など六つの州が置かれていた。編纂史料に記される「代北」は、このうち雲州・朔州・蔚州・代州を指す場合と、河東北部の恒山以北の空閑、すなわち現在の大同盆地のみを指す場合がある。本論で使用する代北は、後者の意

圖1　五代時期(910年)における河東地域北部

(備考)地形は『山西省分縣地圖册』(山東省地圖出版社,2001),政區は『山西省歷史地圖集』(中國地圖出版社,2000)に據って作成。

味で使うものとする。

大同盆地は恒山(唐代の名稱は句注山、あるいは西陘山)[3]と洪濤山に挾まれ、西南から東北方向に廣がる縱長の盆地である。恒山および洪濤山から流れ出たいくつかの河川が盆地の中央を流れる桑乾河に注ぎ込んでいる。唐代初期に鄯陽縣(現在の朔州市)に朔州が置かれ、さらに開元一八年(七三〇)に雲中縣(現在の大同市)に雲州が置かれた。この空閒を一つのまとまった地域として見なすことは、自然地理的にも行政地理上も可能である。

一方、恒山をはさんで南側には代州(治所は雁門縣。現在の代縣)があり、ここには五臺・東冶・雁門の三つの折衝府が置かれていた。その後、大同軍、[4]天安軍(天寶一二載設置)、代北軍(永泰元年設置)の三つの軍鎭が配置された。代州は雁門關を經て雲州・朔州に通じる交通の要所であると同

時に、中國北方の遊牧世界との接點にあたる要衝であった。代州に折衝府や軍鎮が置かれていた事實から、唐朝が北方の防衛線上の軍事據點として代州を重要視していたことがうかがえる。

代州の東には蔚州が置かれていた。蔚州の當初の治所は靈丘縣（現在の山西省靈丘市）で、後に興唐縣（現在の河北省蔚縣）に移されている。蔚州の州域には有名な飛狐道が通っていた。飛狐道は北アジア（モンゴル）と河北を直接結ぶルートであり、唐代にも突厥がこのルートを通って河北の地に進入している。

代州の西側に嵐州（治所は宜芳縣：現在の嵐城鎮）が置かれていたが、代州とは呂梁山を隔てており、自然地理上からも、交通の上からも遮斷されている。

唐末に代北を據點として勢力を伸張した沙陀の中には、ソグド姓を持つ武人が多數見られる。(5) そこで、沙陀に從屬したソグド姓を持つ武人について、編纂史料に見えるものに新出の石刻史料を加えて新たにまとめたものが**表1**である。この表から、ソグド姓を持つ武人は、代北の雲州（安重霸ほか三名）、朔州（安元信ほか二名）、「雲・朔之間」（何懷福ほか一名）、應州（安重誨）を本貫とする者と、恒山以南の蔚州（康君立ほか一名）、代州（李存敬＝安敬思ほか五名。「代郡」「鴈門」は代州に含む）、太原（史敬鎔ほか四名）、潞州（安崇阮）を本貫とする者がいたことが明らかとなる。この他に「振武索葛部」、「沙陀部」、「塞北部落」、「代北三部落」、「沙陀三部落」といった部族名を本貫とする者も見られる。これら「部落」の具體的な地點が明らかになるものは少ないが、その多くは句注山以北の大同盆地に散在していた（後述）。

沙陀に從屬していたソグド姓を持つ者たちの多くが、代北や句注山以南の河東北部を本貫と稱していたのは、もともとこの地にソグド系の人々が居住していたことを意味する。では、この代北にソグド姓を持つ者がいつ頃、移住してきたのだろうか。ここで注目すべき記錄が、『資治通鑑』卷二三二、德宗貞元二年一二月丙寅條であり、そこには

又た〔河東節度使〕馬燧に命じ河東軍を以い吐蕃を擊たしむ。燧、石州に至るや、河曲六胡州皆降り、雲・朔の間に遷す。

表1　沙陀勢力下におけるソグド系武人

	姓名	本　貫	初任先	履　　歴	備　　考	出典
1	李存孝(安敬思)	代州飛狐	李克用	太祖(李克用)が代北で捕虜とし，義兒となる。紀綱に隷し，帳中に給事す。汾州刺史・邠州刺史を經て邢州留後となる。李克用にそむき，景福二年處刑される。		舊五53 新五36
2	康君立	蔚州興唐	段文楚→李克用	乾符中，雲州牙校となり，防禦使段文楚に仕える。……後に李克用を擁立し大同軍防禦留後とす。景福二年九月，毒を賜り死す。	代々邊豪であった。	舊五55
3	史敬思	鴈門	李克用	代州の牙校。武皇が鴈門を節制するや，九府都督となる。後に太原を鎮するや，裨將となる。中和四年六月戰死。		舊五55
4	史建瑭	鴈門	李克用	字は國寶。史敬思の息子。父の蔭をもって若くして軍門に仕える。光化中，昭德軍を典す。	「部落精騎を督」す。	舊五55 新五25
5	史匡翰	鴈門	莊宗(？)	字は元輔。史建瑭の息子。九府都督を世襲し，代州・遼州副使を歴任。同光初め，嵐、憲、朔等州都游奕使となる。	妻の魯國長公主，後晉高祖の妹。	舊五88 新五25
6	史懿	代郡	莊宗	字は繼美。父は史建瑭。父の戰死後，昭德軍使を拜し，莊宗に仕える。		舊五124
7	史敬鎔	太原	李克用	李克用に仕え，帳中綱紀となる。		舊五55
8	安金全	代北人	李克用	若くして驍果，騎射に熟練す。李克用の時，騎將となる。莊宗が潞州を救い，また河朔を平定するのに戰功あり。	代々邊將たり。	舊五61 新五25
9	安審通	代北人	莊宗	安金全のおい。若くして莊宗に仕え，戰功を立て，先鋒指揮使となる。		舊五61
10	安審琦	沙陁部	莊宗	字は國瑞。性格は驍果にして，騎射に長じていた。若くして莊宗に仕え義直軍使となり，本軍指揮使に遷る。	祖父は安山盛，朔州牢城都校。父は安金全，振武軍節度使。	舊五123
11	安審暉	沙陁部	莊宗	字は明遠。安審琦の兄。長直軍使から起家し，外衙左廂軍使に轉じる。莊宗に從い幽、薊を平定。山東に戰い，河南を平定するのに，ともに功績あり。		舊五123
12	安審信	沙陁部	石敬瑭	字は行光。安審琦の從父兄。安審通の弟。世父の安金全が，天成初めに振武節度使となるや，牙將となった。兄の安審通が滄州節度使となるや，衙內都虞候となり，同、陝、許三州馬步軍都指揮使を歴任。	父は安金祐，代々沙陁部偏裨で，名は邊塞に聞こえていた。	舊五123
13	安元信	代北人	李克用	字は子言。騎射に熟練し，若くして李克用に仕える。清泰三年二月，74歳で卒。	父は降野軍使の安順琳。	舊五61
14	安重霸	雲州人	李克用	代北より明宗（李嗣源）と俱に李克用に仕える。後，後梁・蜀に亡命。明宗の時，再び歸順。		舊五61 新五46
15	安重進	雲州人	莊宗	安重霸の弟。尤はだ兇惡で，莊宗に仕える。淮南へ亡命。		舊五61

16	安重誨	北部豪長 應州	明宗	明宗龍潛の時より左右に給事し，邢州を鎖するに及び，中門使となる。	父の安福遷は河東將。	舊五66 新五24
17	康義誠	代北三部落人	李克用	字は信臣。若くして騎射をもって武皇に仕える。莊宗に從い魏博に入り，突騎使となり，累遷して本軍都指揮使となる。		舊五66 新五27
18	康思立	陰山諸部→晉陽人	李克用	性は純厚，善く將士を撫す。若くして騎射をよくし，武皇に仕えて爪牙となり，河東親騎軍使となる。清泰三年，卒。63歳。		舊五70 新五27
19	康延孝	塞北部落人		初め太原に隷屬していたが，汴梁に亡命。同光元年八月，莊宗に歸順。		舊五74 新五44
20	石紹雍	（西夷）	李克用	番字は臯捩(新五は臯捩鷄とす)。騎射を善くし，經遠大略あり，後唐武皇及び莊宗に仕える。平、洺二州刺史を歴任。夫人は何氏。	本は西夷の出(新五)	舊五75 新五8
21	石敬瑭	太原人	莊宗	石紹雍の第二子。景福元年二月二十八日，太原で生まれる。後晉高祖。	四代祖石璟，唐元和中に沙陀軍都督朱耶氏と靈武より入附す。河東陰山府裨校となり，朔州刺史に至る。夫人は秦氏。三代祖石郴は，早薨。夫人は安氏。皇祖石翌，振武防禦使に任じられる。夫人は米氏。皇考は石紹雍。	舊五75 新五8
22	石敬儒	太原？	莊宗	後晉少帝の父。妻は安氏。後唐莊宗の騎將。		舊五81
23	安崇阮	潞州上黨人		字は晉臣。騎射を善くす。	父は安文祐，牙門將。唐末，昭義軍に屬す武人。	舊五90
24	安元信	朔州馬邑人	莊宗	若くして騎射を善くす。後唐莊宗が晉王の時に仕える。ついで明宗の麾下に隷屬し，明宗の卽立するや，捧聖軍使となる。		舊五90
25	康　福	蔚州人	李克用	弓馬に熟練し，若くして後唐武皇に仕え，軍職を歴任し，承天軍都監に充てらる。莊宗卽位するや，馬坊使に任じられる。また，蕃語に習熟す。天福七年，58歳で卒。	代々蔚州軍校。祖父の康嗣は，蕃漢都知兵馬使。父の康公政は，平塞軍使に至る。	舊五91 新五46
26	安彦威	代州崞縣人	明宗	字は國俊。若くして軍卒として唐明宗の麾下に隷屬。善く射し，頗る兵法を知り，明宗これを愛す。		舊五91 新五47
27	何懷福	代々雲、朔の間に居住。	李克用	後唐武皇に仕え小校となる。	先祖は迴鶻人。	舊五94
28	何建	代々雲、朔の間に居住。	石敬瑭	父は何懷福。若くして石敬瑭の帳下に仕え，厩を掌ることを役職とした。後晉高祖が卽位するにおよび，禁軍を典した。	先祖は迴鶻人。	舊五94

29	安重榮	朔州人	石敬瑭	膂力があり，騎射に長ず。後唐長興年間，振武道巡邊指揮使となる。後晉高祖の時，代北より召される。その時，邊士を募り千騎を得て赴いた。	祖父の安從義は，利州刺史。父の安全は，勝州刺史・振武蕃漢馬步軍都指揮使。	舊五98 新五51
30	安從進	振武索葛部人	莊宗	莊宗に從い，護駕馬軍都指揮使となり，貴州刺史を領す。明宗の時，保義・彰武軍節度使となる。後晉高祖の卽位するや，同中書門下平章事を加えられる。	祖父・父ともに唐に仕え騎將であった。	舊五98 新五51
31	安懷盛	沙陁三部落之種	李克用	驍勇をもって聞ゆ。	安叔千の父	舊五123
32	安叔千	沙陁三部落之種	莊宗	騎射に通曉し，莊宗に從って河南を平定し，奉安部將となる。		舊五123 新五48
33	何福進	太原人	莊宗	字は善長。若くして從軍し，驍勇をもって聞える。唐同光の末，莊宗が包圍された時，當時宿衞軍校だった何福進は，死力を盡くして切り拔け，後に明宗はこれを知って嘉之し捧聖軍校に拔擢し，慈州刺史に轉出した。	父は何神劍。	舊五124
34	史彥超	雲州人	劉知遠(?)	性格は驍獷で，膽氣あり。（後漢）龍捷都指揮使に至る。（後周）太祖が卽位するや，虎捷都指揮使に遷る。		舊五124 新五33
35	安萬金	（索葛）	李克用	字は寶山。昔，武皇に從い黃巢を破って紫塞を定む。索葛府刺史，馬軍左第二軍使に遷り，昭義軍左游奕馬軍指揮使に遷り，塞寧軍使に遷り，右先鋒指揮使に遷り，昭義軍衙隊指揮使に遷り，昭義軍在城及び守禦左右廂都指揮使に遷る。後に明宗，嚴州刺史を除受す。貝州刺史を除受せらる。淸泰二年，均州刺史を除受せらる。	曾祖父，諱は德昇，銀靑光祿大夫・檢校太子賓客・故鎭武馬軍指揮使・索葛府刺史。祖父，諱は重胤，銀靑光祿大夫・檢校工部尙書・靜塞軍管內都游奕使・索葛府刺史。父，諱は進通，銀靑光祿大夫・檢校尙書右僕射・守應州別駕・索葛府刺史。夫人は曹氏。	註(1)
36	何君政	大同人		公，部落(鷄田府部落)を主領す。鷄田府部落長史。		註(2)
37	石金俊	朔州神武川上方城人	李克用	若くして騎射に長じる。始め李克用に，後に後唐莊宗に仕え，戰功をもって銀靑光祿大夫・檢校尙書左僕射・兼御史大夫・上柱國，北京飛勝五軍都指揮使に充てられる。		註(3)

略記：舊五＝『舊五代史』；新五＝『新五代史』

註 (1)「晉故均州刺史光祿大夫檢校司徒兼御史大夫上柱國開國男食邑三百戶安府君墓誌」『洛陽出土歷代墓誌輯繩』，中國社會科學出版社，1991年，p.724.

(2)「大晉故鷄田府部落長史何公墓誌銘幷序」『隋唐五代墓誌匯編』「山西卷」，天津古籍出版社，1991年，p.182.

(3)「大周故北京飛勝五軍都指揮使銀靑光祿大夫檢校司空兼御史大夫上柱國贈左驍衞將軍石公（金俊）妻河南軍太夫人元氏墓誌銘幷序」『千唐誌齋藏誌』，文物出版社，1984，p.1235.

と記載される。すなわち、德宗の貞元二年（七八六）、河東節度使馬燧が石州（山西省離石）において「河曲六胡州」を降伏させた後に、「雲・朔の間」、すなわち大同盆地に「河曲六胡州」を移住させている。この「河曲六胡州」こそが、後に沙陀に從屬するソグド系武人の淵源であるのだが、次に節を變えて「河曲六胡州」について述べていこう。

二　「六胡州」と「六州胡」

「河曲六胡州」の沿革についてはすでに小野川一九四二が詳細に述べており、また小野川以降に發見された史料に基づいて張廣達一九八六もその沿革を詳細に論じている。ここでは、小野川氏や張廣達氏の成果、およびその後、特に中國大陸の研究者を中心に進められてきた六胡州および六州胡に關する研究に據りつつ、[6] その後に得られた考古學的發見などの新知見を加えながら、現段階で可能な限りの六胡州とそこの住人である六州胡についてのべていく。

六胡州の沿革は、『元和郡縣圖志』卷四、關內道、新宥州條、『舊唐書』卷三八、地理志、宥州條、『新唐書』卷三七、地理志、宥州條などに記載がある。『元和郡縣圖志』卷四、關內道、新宥州條には、

初め、調露元年（六七九）靈州南界に魯・麗・含・塞・依・契等六州を置き、以て突厥降戶を處らしむ。時人之を六胡州と謂う。

とある。『新唐書』卷三七、地理志、宥州條には、

調露元年、靈・夏の南境に降突厥を以て魯州・麗州・含州・塞州・依州・契州を置き、唐人を以て刺史と爲す。之を六胡州と謂う。

とあって、六胡州の設置場所は靈州・夏州の南境であり、また六胡州の刺史が唐人であったという。

六胡州の具體的な位置について、編纂史料からは以上の漠然とした情報しか得られなかったが、一九八五年、寧夏回族自治區鹽池縣西北四八キロメートルの地點にある蘇步井鄉で六座の唐墓が發掘され、これによって六胡州の具體的な位置

が推測可能となった。というのは、この唐墓群の一つから誌題に「大周□□□都尉何府君墓誌銘幷序」[7]と記された墓誌銘が發見され、その誌文に、

〔何〕君□□□□□大夏の月氏の生なり。……祖の乙未、唐の上柱國たり。……父の盤池は□□都尉たり。……粤に久視元年九月七日を以て、魯州如魯縣□□里の私第に終る。君、春秋八十有五。其の月廿八日を以て□城東の石窟に遷窆す。

記されていたことによる。何府君（名は不詳）の何姓はクシャーニヤ出身のソグド人が中國で稱した姓であり、また、同時に發掘された別の墓の石門には胡旋舞が彫刻されていることから、これら六座の唐墓群はソグド系住民すなわち「六州胡」を埋葬したものと判斷された。さて、何府君墓誌銘には、彼の被葬地が六胡州の一つ、魯州の東郊外であったと記される。すなわち、この墓誌銘の記載からこの墓の發見地の寧夏回族自治區鹽池縣蘇步井鄉が、唐代六胡州の一つである魯州の東に位置していたことが明らかとなったのである。[8]すると、魯州は唐代の靈州と鹽州の境界、現在の寧夏回族自治區鹽池縣と靈武縣との境界にあったことが推測できる。その他の五州については、現在のところ具體的位置は不明ではあるが、現在のオルドス南部に存在していたことは確實である。

「六胡州」の住民は「六州胡」と稱されていたが、彼らの實態はどのようなものであったのだろうか。第一に六胡州の住民について、『元和郡縣圖志』や『新唐書』「地理志」は「突厥降戶」「降突厥」、すなわち東突厥第一カガン國が瓦解した後、唐朝へ內徙した突厥の民を置いたものと記す。しかし、「六州胡」の「胡」字は、唐代では西域からやってきた人、特にイラン系の人々を指すのに使用される場合もあり、突厥のみを指すわけではない。前述のごとく六胡州の一つ、魯州の住民は何というソグド姓を冠しており、また、開元九年（七二一）にオルドスの蘭池州で勃發した反亂に參加した者たちは、ソグド姓を冠していた。『舊唐書』卷八、玄宗本紀、開元九年四月庚寅條に、

夏四月庚寅、蘭池州の叛胡の顯首、僞稱葉護の康待賓・安慕容、爲多覽殺大將軍の何黑奴、僞將軍の石神奴・康鐵頭

等、長泉縣に據り、六胡州を攻陷す。

と記され、康・安・何・石などのソグド姓が確認できる。調露元年（六七九）に置かれた六胡州は後に統廃合されていき、神龍三年（七〇七）に蘭池都督府が復置されている。康待賓が反亂を起こした蘭池州は、この蘭池都督府を指すか、あるいはそれにちなんだ名稱と考えられ、調露元年設置の六胡州の流れをくむことは間違いない。つまり康待賓以下、ソグド姓を冠している者たちは、六胡州の住民とみなせよう。すなわち、六胡州の住民である六州胡は、突厥ではなく、ソグド人であると考えてよい。[9] 突厥碑文にも六州胡を“altï čub soγdaq”、すなわち「六州のソグド人」と記している。[10] つまり東突厥第二カガン國の人々は、六州胡をソグド人と見なしていたのである。

今、このことをさらに別の具體的史料によって補ってみたい。まず、六胡州の刺史には「唐人」が任命されていたと『新唐書』「地理志」は傳えるが、實際にはソグド系の者もいた。李至遠「唐維州刺史安侯（附國）神道碑」（『文苑英華』巻九二〇）に、

〔安〕侯の諱は附國、其の先は安息より出で、國を以て姓と爲す。有隋の中原を失馭するや、何も無く突厥時に乗じ、沙漠に籍雄たり。侯の祖の烏喚、頡利吐發の番中と爲り、官品は稱して第二爲り。……父は朏汗……貞觀の初め、部する所の五千餘を率い入朝す。詔して維州に置き、卽ち朏汗を以て刺史と爲し、左武衛將軍を拜し、累ねて左衛右監門衛二大將軍を授かり、定襄郡公に封ぜらる。……〔安侯〕も亦、貞觀四年、父と俱に闕下に詣る。……調露二年二月十八日を以て、寢疾し神都に終る。春秋八十有三。……次子、魯州刺史の思恭たり。

と見え、この墓碑の記載から以下の事實が明らかとなる。第一に、安附國は「安息」出身の後裔であると稱していること。ただし、安息を本貫とすることは唐代に中國へ移住してきたソグディアナのブハラ（安國）出身のソグド人がしばしば假託したものであり、[11] 實際にはブハラ出身のソグド人の後裔と考えられる。第二に、安附國の祖父の烏喚は東突厥第一カガン國に從屬していたこと、第三に父の安朏汗の時に安附國とともに唐へ入朝し、その後、安附國は四川の維州刺史の職に

あったこと、そして第四に安附國の息子の安思恭が魯州刺史であったことである。安思恭が魯州刺史であった時期は、安附國が卒した調露二年（六八〇）前後と考えられるから、六胡州の設置直後にソグド系の刺史が存在したこととなる。

また、一九八一年に河南省洛陽南郊の龍門石窟の東側で發掘された「唐故陸胡州大首長安君墓誌」（洛陽市文物工作隊『洛陽出土歴代墓誌輯繩』、中國社會科學出版社、一九九一、四四四頁）に、

〔安〕君の諱は菩、字は薩、其の先は安國の大首長なり。匈奴を破り、衙帳百姓もて中國に歸す。首長は京の官品の五品に同じ、定遠將軍に封ぜられ、首長は故の如し。曾祖の諱は鉢達干。祖の諱は系利。……夫人何氏、其の先は何大將軍の長女たり、金山郡太夫人に封ぜらる。

と記される。誌題から墓主の安菩が六胡州大首長であることが判明し、誌文から安菩が「安國」すなわちブハラ出身のソグド系であること、夫人が何氏というクシャーニヤ出身のソグド系の者であることが明らかとなる。安菩が六胡州の刺史であった事實は確認できないものの、六胡州のリーダー的存在であったことは確かである。誌文中の「匈奴」は、秦漢時代の匈奴ではなく、唐代の北アジアにいた遊牧系民族を指す語句であり、すなわち唐代の東突厥を指す。[12] すなわち、「匈奴を破り、衙帳百姓もて中國に歸す。」とは、東突厥が唐・太宗に歸順してきた事實を記した部分と考えることができる。とすれば、安菩に率いられて唐へ内徙してきた「衙帳百姓」とは、もとは東突厥に從屬していた安姓を中心とするソグド系集團であり、これらが六胡州の構成員の一部であったと考えられる。

六胡州の一般の個々の住民がソグド系であったことを裏付ける具體的な根據としては、前述の「大周□□□都尉何府君墓誌銘幷序」から、魯州住民に何姓のソグド姓を冠する者がいたことが明らかとなるほか、さらに敦煌文書「唐景雲二年張君義勳告」[13]に、

含州の安神慶……依州の曹飯陁、壹人、魯州の康□、壹人

と見え、六胡州のうち含州、依州、魯州にそれぞれ安姓、曹姓、康姓のソグド系住民がいたことが判明する。

以上のことから、六胡州の刺史や首長がソグド系であったばかりでなく、六胡州の住民にもソグド系の人々が廣汎に存在したことが明らかとなる。

では、六胡州に居住していたソグド系の人々は、どのような生業についていたのであろうか。この點、史料上の制約もあり、實のところよくわからない。ただ、『冊府元龜』巻九九九、外臣部に、

玄宗の開元二年（七一四）九月、太常少卿の姜晦、上封して請うらく、空名の告身を以て六胡州において馬を市わしめんことを、と。

とみえ、六胡州では馬の放牧が行われており、六州胡の中には馬の放牧に從事していた者が存在したと考えることができる。このことは、六州胡たちがソグド系であるといっても、東突厥カガン國に從屬していた時期に突厥と相互に影響しあい、ソグド人たちも遊牧文化を身につけていたことを示唆する傍證となろう。この點について、さらに史料を提示してみたい。

開元八年（七二〇）にオルドスで反亂を起こした康待賓は、先に見たように「蘭池州の叛胡顯首僞稱葉護康待賓」と稱し、また康待賓の餘黨の康願子は、『舊唐書』巻九七、張説傳に、

時に康待賓の餘黨、慶州方渠の降胡康願子の、自ら立ちて可汗と爲り、兵を擧げて反し、監牧馬を掠めんことを謀り、西のかたに河を涉り出塞せんとする有り。

とあるように可汗と稱している。康待賓の自稱した「葉護」は突厥の官職名ヤブグ（yabγu）の、康願子の自稱した可汗は突厥の首長の稱號であるカガン（qaγan）を、それぞれ漢字に音轉寫したものである。また、前述の「六胡州大首長」であった安菩の曾祖父の名は「鉢達干」であり、達干は突厥の職號であるタルカン（tarqan）の漢字音轉寫である。これらの事實は、六州胡が突厥の影響を受けたソグド人であることを示している。

さらに、康待賓の軍について、『舊唐書』巻八、玄宗本紀、開元九年七月己酉條に、

己酉、王晙、蘭池州叛胡を破り、三萬五千騎を殺す。

と記され、康待賓の軍の單位を「騎」で示しており、主力は騎馬軍であったことが推察できるのである。

以上、述べてきたことから、六州胡とは唐朝に歸順した東突厥の遺民ではあるが、その實態は東突厥カガン國内にコロニーを形成していたソグド人の後裔であるとみなすことができる。さらに、このソグド人は北アジアにおいて突厥とともに居住していた結果、突厥と相互に影響しあい、遊牧に從事し、中には騎射技術を習得するなど、遊牧文化を身につけた者たちであったとみなすことができる。その意味において、從來の「六州胡」に代わるより廣義な概念として、彼らをソグド系突厥と呼ぶこととする。[14] ソグド系突厥は、狹義にはソグド人の血を引き、突厥と相互に影響しあって遊牧文化を身につけた者の呼稱であるが、廣義にはその他の種族で、おそらくソグドの影響を受け、その結果ソグド姓を冠するようになった者も含むと考えることができる。ソグド姓を冠する者の中には、ウイグルや奚の出身であることを自稱する者もいるからである。[15]

このような騎射能力を有したソグド系突厥（六州胡）は、唐朝やそのほかの勢力にたびたび利用されている。例えば、武則天の萬歲通天元年（六九六）に東北アジア（中國東北部）で契丹が唐朝に對して反亂を起こし、營州を陷落させる事件がおきた。この時、唐朝では對策が講じられた。陳子昂の「上軍國機要事八條」（『陳伯玉文集』卷八）はこの時の上奏文であるが、

大いに河東道及び六胡州、綏・延・丹・隰等州の稽胡の精兵を發し、悉く營州に赴かしむ。

と見え、契丹征伐に六州胡、すなわちソグド系突厥が動員されたことが判明するのである。

また安祿山の反亂時、安祿山の軍下にもソグド系突厥が存在したことが確認できる。「唐故試光祿卿曹府君墓誌幷序」[16]に、

（曹）公の字は閏國、含州河曲の人なり。……公、邊薊に行旅し、幼くして戎律を閑う。天寶の載において、祿山の孽を作し、思明の禍を襲うに遇い、公其の中に陷從し、鋒刃に厄され、拔擢され高用され、爲に公を雲麾將軍・守左

金吾衛大將軍に署す。

とある。墓誌の記載から曹閏國の本貫は含州、すなわち六胡州の一つであること、曹閏國は安史の亂前に河北の北部へ何らかの事情によって移動し、そこで安史の亂に參加したことがわかる。これは安史の亂に參加したソグド系突厥の個別具體的な事例である。また、『資治通鑑』卷二二〇、至德二載一二月條には、

安慶緒の北のかたに走るや、其の大將の北平王李歸仁及び精兵曳落河・同羅・六州胡數萬人、皆范陽に潰歸し、過ぐる所俘掠し、人物遺す無し。史思明、厚く之の爲に備え、且つ使を遣りて之を范陽の境に逆招せしめ、曳落河・六州胡皆降る。

と見え、安史軍に「六州胡」、すなわちソグド系突厥が集團で存在していたことが明らかとなる。

武則天時期に唐が契丹征伐を行った際に、また安祿山が唐に對し反亂をおこすにあたって、それぞれソグド系突厥を利用したのは、間違いなく彼らの軍事的能力に目をつけたからであり、逆にソグド系突厥は騎射技術に優れた軍事集團として、ひろく唐代の支配階層に認識されていたということができよう。

契丹征伐に參加したソグド系突厥のその後の動向については現段階では史料上の制約からはっきりしない。一方、安史の亂に參加したソグド系突厥の一部については、そのまま安史の亂後に河北に置かれた河朔三鎭に武人として屬したことが確認できる。[17] また、この河北のソグド系突厥とは別に、六胡州が置かれていた現在のオルドス近邊に安史の亂後も殘っていたソグド系突厥も存在したようである。唐朝に對し、ほぼ一貫して半獨立體制を維持し續けた河朔三鎭のひとつの藩鎭魏博において、太和三年（八二九）に何進滔なるものが魏博衙軍により節度使に選出された。何姓はソグド姓であり、何進滔の夫人は康氏、彼の子息の何弘敬の夫人は武威の安氏であり、それぞれソグド姓同士で婚姻關係が結ばれていることから、[18] 何進滔がソグド系であることは間違いない。また何進滔は六胡州と隣接していた靈武（靈州）を本貫としている。六胡州は調露元年からほど近い時期に改編され、その後もしばしば名稱が變化している。また、ソグド系突厥もその騎射

能力を買われ、特に近邊の靈州に設置された朔方節度使に雇用された者も少なくなかったと考えられる。このような事情から靈州に移住し、靈州を本貫と稱するソグド系突厥が生まれたと考えることができる。すなわち何進滔は、もとは六州胡に屬し、後に靈州へ移住したソグド系突厥の後裔であると考えることができる。しかし何進滔は安史の亂以來、河北に居住し續けたソグド系突厥の後裔ではない。『舊唐書』卷一八一、何進滔傳に、

何進滔は靈武の人なり。曾祖孝物、祖俊は、並びに本州の軍校たり。父默は、夏州衙前兵馬使・檢校太子賓客・試太常卿たり。進滔の貴を以って、左散騎常侍を贈る。進滔は魏に客寄して軍門に委質し、節度使田弘正に事う。

とあり、何進滔の曾祖父と祖父は靈州、おそらく朔方（靈武）節度使下の武人であり、父は夏綏銀節度觀察使に屬した武人であり、何進滔の代に河北の魏博へ移住してきたことが明らかである。何進滔が仕えた魏博節度使田弘正の在職期間は元和七年（八一二）から元和一五年（八二〇）であるから、何進滔の河北への移住時期は、この時期とみなすことができる。すると、元和年間のはじめまでオルドスにソグド系突厥が殘存していたことが判明する。ただし、それ以前の貞元二年（七八六）に、オルドスにいたソグド系突厥の一部はすでに雲州・朔州の間へ移住していたことは先に見たとおりである。貞元二年に雲州・朔州の間へ移住したソグド系突厥については、『資治通鑑』卷二四四、太和四年三月條に、

陘北の沙陀素より驍勇たり、九姓・六州胡の畏伏する所と爲る。〔河東節度使柳〕公綽奏すらく、其の酋長朱邪執宜を以て陰山都督・代北行營招撫使と爲し、雲・朔の塞下に居らしめ、北邊を捍禦せしめんことを、と。

と見え、太和年間（八二七―八三五）の代北におけるソグド系突厥の情報が得られ、このころには代北において沙陀やその他の「九姓」と記される諸族と混住していたことが明らかとなる。しかし、代北におけるソグド系突厥の情報は、これ以降、唐末黄巣の亂の時まで史料上には現れない。そこで次節では、黄巣の亂時期のソグド系突厥について、沙陀の勢力伸張に關連付けて檢討したい。

三　代北における沙陀の勢力伸張とソグド系突厥

（一）沙陀の東遷

代北におけるソグド系突厥と沙陀の結びつきを論じる前に、まず、沙陀の代北への移住過程を概観しておきたい[19]（図2参照）。

沙陀に關して、『舊五代史』巻二五、武皇紀上では、李克用の祖先の朱邪氏は隴右金城（甘粛省蘭州市）の人という。同書によれば、沙陀の始祖の拔野が、唐の太宗に從って高句麗および薛延陁討伐に功績をあげて金方道副都護となり、そのため瓜州（甘粛省安西市の東南）に居住し、その後、太宗が薛延陁諸部を平らげた際、同羅・僕骨の人を隷屬するために置いた沙陀都督府があり、永徽年間（六五〇―六五五）に、拔野はこの沙陀都督府の都督となり、その後子孫が五世にわたってその職を世襲し、貞元年間（七八五―八〇五）に李克用の曾祖父にあたる盡忠が沙陀府都督となったと傳える。

一方、『新唐書』巻二一〇、沙陀傳によると、沙陀は西突厥の別部である處月の種とあり[20]、貞觀年間（六二七―六四九）、西突厥の阿史那賀魯が唐へ歸順した際、處月の朱邪闕俟斤阿厥も内屬してきた話を載せる。永徽年間の初め、阿史那賀魯が反亂を起こすと、朱邪孤注というものが招慰使を殺して呼應し、兵を率いて牢山に據った。この時、射脾俟斤の沙陀那速は阿史那賀魯に從わなかったため、唐の高宗は賀魯の所領を沙陀那速に授け、また、弓月道總管の梁建方・契苾何力が兵を引いて朱邪孤注を斬り、九千人を捕縛したという記事が見える。この唐初の沙陀に關する記録に、朱邪姓と沙陀姓が見える點に注意したい。

龍朔年間（六六一―六六三）の初め、處月酋長の沙陀金山は、武衛將軍薛仁貴に從い鐵勒を討ち、そこで墨離軍討擊使を授けられた。墨離軍は瓜州に置かれていたので、この時に沙陀は瓜州に居住したのかもしれない。沙陀金山は長安二年

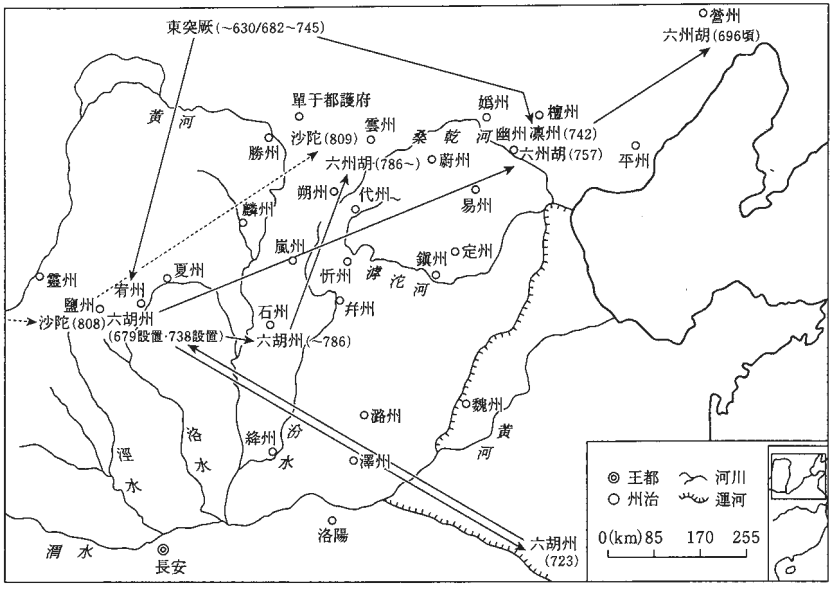

圖2　華北における突厥・六州胡・沙陀の移動

(備考)譚其驤『中國歷史地圖集』(隋・唐・五代十國時期)(地圖出版社，1982年)にもとづき作成。

(七〇二)には金滿州都督に昇進し、さらに張掖郡公に封ぜられた。

金山が沒すると、子の〔沙陀〕輔國が跡を繼いだ。[21] 先天年間(七一二―七一三)の初め、輔國は吐蕃の壓迫を避け、部落を北庭(新疆ウイグル自治區ウルムチ市の東北)に移し、その麾下の者を率いて入朝してきた。開元二年(七一四)、輔國はふたたび金滿州都督を領し、その母の鼠尼施を封じて鄯國夫人とした。

輔國が死ぬと、子の〔沙陀〕骨咄支が繼いだ。天寶年間(七四二―七五六)の初め、回紇が歸順してくると、骨咄支に回紇副都護を兼任させ、また、肅宗に從って安史の亂を平らげた功績により、特進・驍衛上將軍を拜している。

骨咄支の死後、その子の〔沙陀〕盡忠が嗣ぎ、累遷して金吾衛大將軍・酒泉縣公となった。廣德二年(七六四)、吐蕃と戰い甘州(甘肅省張掖市)へ逃げた河西節度使楊志烈が、沙陀に殺害されたという記事が『資治通鑑』卷二二二に見えるので、沙陀はこの頃すでに甘州に移住していたかもしれない。ただ、『新唐書』沙陀傳は、貞元

六年（七九〇）に沙陀部七千帳が吐蕃に服屬し、甘州に遷ったと記している。

元和三年（八〇八）、吐蕃によって甘州から遷されるのをきらった沙陀は、盡忠と朱邪執宜との合議により靈州（寧夏回族自治區靈武縣西南）へ奔って唐朝に歸屬してきた。この逃避行の際、吐蕃の攻擊により盡忠は戰死し、朱邪執宜が沙陀のリーダーとなったようである。事實、唐朝は沙陀を鹽州（寧夏回族自治區鹽池縣南）に居住させ、陰山府を置くと、朱邪執宜を陰山府兵馬使としたのである。翌年、元和四年（八〇九）、靈鹽節度使范希朝が河東節度使に轉任するのに伴い、沙陀も太原へ移動することとなる。范希朝は、そのうち千二百騎を精選して沙陀軍とし、その他は定襄川（定襄縣は山西省大同西北）に置いた。朱邪執宜は神武川の黃花堆（朔州）に留まった。元和五年（八一〇）、河東節度使王鍔の上奏により、沙陀は十府に分散させられている。この執宜の子が赤心、すなわち後の李國昌である。

以上が沙陀の東遷の概略である。『新唐書』沙陀傳が記す沙陀金山から李克用にいたる系譜は非常に詳しいものの、森部・石見二〇〇三において、新出の李克用墓誌銘を利用して、作爲的なものであることをすでに指摘した。今、その結論だけを言うならば、沙陀という集團は、沙陀部と朱邪部からなり、それぞれ沙陀姓、朱邪姓の首長が率いていた。上述のごとく、太宗から高宗にかけての時期の沙陀に關する記錄に、朱邪姓と沙陀姓を持つ人物が別々に登場すること、また安史の亂鎭壓に沙陀も唐朝側に立って參戰したが、[22] その時沙陀部と朱邪部がそれぞれ參加していることからも明らかである。この二大集團のほかにも、沙陀には樣々な大小の部族が加わっていたと想像でき、それが廣義の沙陀である。『舊五代史』や『新唐書』に見える、新疆から最終的に河東北部まで移住してきた沙陀とは、このような集團であった。この沙陀集團は、當初、沙陀姓の首領（沙陀金山～盡忠）が率いていたが、沙陀が甘州から靈州へ、さらに鹽州にいたる過程において朱邪姓の者（朱邪執宜）が實質的なリーダーになりかわった。李克用はこの朱邪姓の流れをくむものである。

（二）黄巣亂時における沙陀の動向

沙陀が歴史上、活發な活動をしめすようになるのは代北に移住してから、約七十年後のことである。この時、沙陀の首領は李克用であった。李克用が代北でリーダーシップをとるきっかけとなったのは、乾符五年（八七八）正月、黄巣の亂の混亂に乘じ、雲州沙陀兵馬使の李盡忠と牙將の康君立・薛志勤・程懷信・李存璋らが、蔚州にいた沙陀副兵馬使李克用を擁立することを畫策したことにはじまる。この時、大同防禦使兼水陸發運使の段文楚を廢し、李克用は雲州の州事と軍事の實權を掌握したが、唐朝はこのことを認めなかったので、兩者は對立することとなった。同年一〇月[23]、唐朝は昭義節度使李鈞、盧龍節度使李可舉に詔し、吐谷渾酋長の赫連鐸および沙陀酋長の李友金、安慶酋長の史敬存[24]、薩葛酋長の米海萬とともに、李國昌・克用父子を討伐させた。ところが同年一二月、この戰鬪で昭義節度使李鈞が戰死し、廣明元年（八八〇）正月には、沙陀は鴈門關より南進して忻州・代州を攻擊し、さらに同年二月、沙陀の二萬餘人が、晉陽すなわち太原に迫った。

ところが、この後戰局は一變する。廣明元年（八八〇）六月、蔚朔節度使の李琢が、沙陀の二千人が來降したことを上奏してきたのである。當時、李琢は代州に駐屯し、盧龍節度使李可舉、吐谷渾都督赫連鐸とともに沙陀討伐にあたっていた。一方、李克用は大將の高文集に朔州を守らせ、自らは衆を率いて李可舉と雄武軍で戰っていた。赫連鐸は高文集に歸順を呼びかけ、その結果、高文集は李克用の武將の傅文達を捕らえ、沙陀酋長で李克用の族父といわれる李友金、薩葛都督米海萬、安慶都督史敬存とともに李琢に降伏したのである。[25]

この情報を耳にした李克用は、同年七月、雄武軍から兵を引いて戻り、朔州の高文集を討とうとしたが、李可舉は行軍司馬の韓玄紹をして雄武軍の西の藥兒嶺で李克用を迎擊し、これを大いに破った。この藥兒嶺の戰いで李克用擁立に功績のあった李盡忠、程懷信は戰死し、また、沙陀は雄武軍でも敗れ、一萬人を失った。李琢、赫連鐸が蔚州に進攻すると、

李國昌も敗れ、李國昌・克用父子はその宗族とともに北へ逃れ、當時陰山山脈附近に據っていた達靼に亡命した。この結果、唐朝は詔して赫連鐸を雲州刺史・大同軍防禦使、吐谷渾の白義誠（白義成）を蔚州刺史、薩葛の米海萬を朔州刺史とし、李可擧には兼侍中を加えた。この時點で李克用を中心とする沙陀は完膚なきまで打ちのめされ、元和年間に代北へ移住して以來築き上げてきた代北での主導權を喪失するとともに、李克用の一族の李友金が唐朝へ歸順するという沙陀集團内での分裂という事態も見られたのである。

達靼へ亡命した李克用が、ふたたび代北へ歸還するきっかけとなったのは、つぎのような事情による。中和元年（八八一）二月、黄巣が長安を陷落させると、代北監軍の陳景思は沙陀酋長の李友金および薩葛・安慶・吐谷渾の諸部を率い京師を救わんとし、絳州で黄河を渉ろうとした。しかし沙陀出身で絳州刺史の瞿稹[26]が、黄巣の勢力はなお盛んであり輕々しく進軍すべきでないと進言したことにより、鴈門へ歸還し兵を募ることとした。[27]三月、瞿稹と李友金は代州に至り、兵を募り三萬人を得たが、これらはすべて北方の「雜胡」で、瞿稹と李友金はこれを制することができなかった。そこで、達靼に亡命していた李克用を呼び戻して再び指導者にせんとし、詔をもって李克用の罪を赦すこととなり、李克用は達靼の諸部を率いこれに赴いた。さらに中和二年（八八二）八月、李國昌も一族を率いて達靼より代州へ歸還した。この間、河東北部では李克用と唐朝側の河東節度使などとの間で戰鬪も生じたが、最終的には同年一二月、忻・代等州留後の李克用は鴈門節度使に正式に任命され、黄巣の亂征討の任に就くに至ったのである。

以上の經緯を、ごく大雜把にみると、沙陀酋長李友金、薩葛都督、安慶都督の唐朝への降伏→李國昌・克用父子の達靼への亡命→李友金・瞿稹（ともに沙陀系）による李克用の達靼より召還・再擁立ということになる。この時、李友金と行動をともにしていた薩葛、安慶の諸部も李克用勢力下へ吸收されていったことに注意しなければならない。

以上のように、沙陀の勢力伸張の轉機は、黄巣亂中、達靼より中國へ戻ったときである。この時、代北の遊牧系諸族の多くが沙陀に合流したと考えられる。その中でも薩葛部（米海萬）や安慶部（史敬存）は、その首長がソグド姓を冠してい

ることから、ソグド系の集團であり、まさに貞元二年に「雲・朔の間」に移住したソグド系突厥の後裔とみなすことができよう。しかし、李克用に合流した後、編纂史料上において「薩葛」の記録は見えなくなり、また、その實態もよくわからない狀況であった。ところが、近年、墓誌銘などの公刊により、これらの集團に關する情報が少しずつ增加しつつある。以下、石刻史料を利用し、沙陀に從屬したソグド系突厥の具體像を檢討していきたい。

（三）代北におけるソグド系突厥

「薩葛部」「安慶部」の名で編纂史料に登場する集團は、代北にいたソグド系突厥であるが、いったいどのような集團であったのだろうか。

まず「薩葛」は「薛葛」「索葛」とも表記される。[28] Pulleyblank 一九五二以來、「薩葛」「索葛」「薛葛」はともにSoghdの漢字音轉寫文字と考えられてきた。しかし最近では、別の語、たとえばソグドの武人を指す語ではないかという考え方もあるが、いまだ結論には至っていない。假に「薩葛」「索葛」「薛葛」がSoghdの漢字音轉寫文字ではないとしても、その集團を率いる首長が米海萬というソグド姓を冠していることから、この集團がソグドと關係があることは否定できない。

一方、「安慶」については、その語源は不明である。ただ、唐末の「安慶部」の首長は史敬存といい、太平興國四年（九七九）に宋朝へ歸順してきた「安慶府」の主は安海進といい、ともに史姓と安姓というソグド姓であることから、「安慶」もソグド系の集團と考えることができる。

「薩葛」（「索葛」「薛葛」）および「安慶」に關して、編纂史料からは以上のような情報しか引き出せなかったが、近年、唐末・五代時期の墓誌銘の發見・公刊により、編纂史料からは不明瞭であった五代時期の「索葛」の存在が確認でき、またその他の部落、およびその生活形態の一端が明らかとなりつつある。以下、石刻史料にもとづき、この事實を明らかにしていきたい。

まず、「索葛」に關する石刻史料として、「安萬金墓誌銘并序」[29]および彼の夫人の墓誌銘がある。「安萬金墓誌銘」によると、安萬金の家系と略歴は以下のようなものである。

晉の故均州刺史・光祿大夫・檢校司徒・兼御史大夫・上柱國・開國男食邑三百戸の安府君の墓誌。

公、諱は萬金、字は寶山。……曾、諱は德昇、銀青光祿大夫・檢校太子賓客・故鎮武馬軍指揮使・索葛府刺史たり。……祖、諱は重胤、銀青光祿大夫・檢校工部尚書・靜塞軍管內都游奕使・索葛府刺史たり。……皇、諱は進通、銀青光祿大夫・檢校尚書右僕射・守應州別駕・索葛府刺史たり。……妣は曹氏なり。長興二年、鹿邑縣太君を贈らる。公、卽ち司空・太君の愛子なり。……〔公は〕初め索葛府刺史、馬軍左第二軍使に遷り、昭義軍左游奕馬軍指揮使に遷り、塞寧軍使に遷り、右先鋒指揮使に遷り、昭義軍衙隊指揮使に遷り、昭義軍在城及び守禦左右廂都指揮使に遷る。後に嚴州刺史に除せらる。前後、指揮使たること七處、刺史たること二任。先に何氏と婚す。長興元年十月內、陳留縣君に封ぜらる。……次室、米氏、子一人を生む。元審、前の索葛府刺史なり。（夫人何氏墓誌銘[30]では「哀長子の元審、索葛府の官を授く」とある。）……次室、趙氏、女一人を生む。石家に事う。

以上の記述から明らかとなるのは、①安萬金の家系は彼の曾祖父から彼の息子にいたるまで五代にわたって「索葛府刺史」を世襲していたこと、②安萬金の姓がブハラ出身のソグド人が名乘る安姓であり、彼の母親はカブーダン出身の曹姓、安萬金夫人はクシャーニヤ出身の何姓、側室はマーイムルグ出身者の米姓、そして安萬金の娘の一人はタシュケント出身者が名乘る石姓に嫁いでおり、安萬金をはさんで前後三世代にわたってソグド姓同士で婚姻關係を結んでいたことの二點である。このソグド系の安萬金が「索葛府」刺史を代々世襲してきたという記述から、安萬金の家系は「索葛府」という集團のリーダー格の家柄であったこと、「索葛」の語がソグドに關連し、その首長もソグド姓であることから、墓誌に見える「索葛府」がソグドの集團であると考えることができる。すなわち安萬金の家系は「索葛府」というソグド系集團を統率するものであったわけである。また、「安萬金墓誌銘」の撰述された年は後晉の天福年間（九三六―九四四）であるか

ら、後晉時期まで「索葛府」が存在していたことが明らかとなる。ただし、この安萬金の「索葛府」と唐末に編纂史料で見られた米海萬が率いた「薩葛」との關係は、殘念ながら現段階では明らかではない。

次に「索葛」以外のソグド系集團に關する情報を傳える石刻史料として「何君政墓誌銘」[31]を紹介してみたい。

大晉の故鷄田府部落長史何公の墓誌銘幷びに序

公、諱は君政、家は本大同の人なり。公、部落を主領す。……去る長興三年十二月一日、代州横水鎮に於いて天命を終る。夫人安氏、……男五人有り。……新婦三人、長、安氏、次、康氏、次、康氏なり。

「何君政墓誌銘」の內容から、墓主の何君政は、大同すなわち唐・五代の雲州を本貫とし、ソグド姓の何姓を冠していたこと、また、何君政の夫人が安氏であり、五人の息子のうち、三人の夫人がそれぞれ安氏・康氏・康氏であって、いずれもソグド姓同士で結婚がなされていたことが明らかとなり、このことから、何君政はソグド系突厥とみなすことができる。

ところで何君政の肩書きは「鷄田府部落長史」と誌題にみえる。「何君政墓誌銘」には何君政の父や祖父、曾祖父の經歷は記されず、「鷄田府部落長史」という職を何君政の家系が世襲してきた事實は確認できない。また、何君政の息子たちが「鷄田府部落長史」を世襲した事實も確認できない。この點、「索葛府刺史」を世襲してきた安萬金とは異なるが、少なくとも何君政が「鷄田府部落」の首長だった點は間違いない。

この「鷄田府」という名稱は、五代の史料には見えず、實に唐代オルドスにテュルク系の阿跌（Adiz）を置いた羈縻州名として確認できる。[32] ソグド系突厥の何君政が率いる部落名が、テュルク系の阿跌の羈縻州名の「鷄田」を稱しているのはいかなる理由があるのだろうか。一つは、實は何君政は阿跌（Adiz）の末裔であるが、代北へ移住してくる過程においてソグド系突厥と關係を結び、そのうち何姓を名乘るようになったという解釋ができる。別の考え方として、六州胡の流れを引くソグド系突厥の何君政が代北に移住し、その地に居た阿跌（Adiz）を吸收し、と同時に彼らの舊羈縻州名を部落名に假託したとも考えられよう。ただし、この點を裏付ける具體的史料は現段階ではないので、推測の域をでない。とも

あれ、何君政を廣義のソグド系突厥と見なしてよいだろう。

最後に代北におけるソグド系突厥の具體的な生活狀況を記した史料として「石金俊墓誌銘」(33)がある。

〔石〕府君の名は金俊、朔州神武川上方城の人なり。幼くして騎射を善くし、司馬の兵法を習う。長じて豪俠と爲り、牛馬を遊すこと谷量たり、世よ強族爲り。……莊宗皇帝、梁室に復讐するに洎び、兵を孟津に按じ、軍旅の勞を積し、銀青光祿大夫・檢校尚書左僕射・兼御史大夫・上柱國に累遷し、北京飛勝五軍都指揮使に充つ。……明宗皇帝は府君の貔貅の良將、豐沛の故人を以て、制して資州刺史を授く。對えて曰く「臣は朔漠に生まれ、本もと以弓□□效。」……以て長興七年六月二十一日、遘疾して太原の私第に卒す、享年五十八。天福四年、檢校司空を贈らる。八年、左驍衛將軍を贈らる。嗣子は今の義州太守仁贇なり。以て天福三年十一月七日、卜して西京河南縣平樂鄉朱陽里に遷す。

墓主の石金俊は朔州を本貫とし、ソグド姓を冠していることから貞元二年（七八六）に雲州・朔州に移住した六州胡の末裔、すなわちソグド系突厥とみなすことができる。誌文の「牛馬を遊すこと谷量たり」という表現から、石金俊の朔州における居住形態は、遊牧生活を基本とするものであったことがうかがわれる。すなわち、この石金俊は代北の地において遊牧生活を保持し續けていたのである。石金俊は李克用・後唐莊宗・後唐明宗に仕え、長興七年（九三六）六月に卒しているから、五代後唐のころまで朔州で石金俊の一族は遊牧生活を維持し、そこで培われた騎射技術をもって沙陀に仕えたと考えることができる。

大同盆地にいたソグド系突厥が、遊牧生活、あるいはそれに近い生活形態を保持していたことは、「石金俊墓誌銘」以外、編纂史料中にもその狀況を傳える資料がある。後晉の成德節度使だった安重榮が、燕雲十六州が契丹に割讓された後に、後晉高祖へ上表した文が殘されている。『舊五代史』卷九八、安重榮傳に、

臣、昨に熟吐渾節度使の白承福・赫連公德等、各本族三萬餘帳を領し、應州の地界より奔歸し王化するに據り、續きて生吐渾幷びに渾・奚芯・兩突厥の三部落、南北將沙陀・安慶・九府等、各部族の老小を領し、牛羊・車帳・甲馬を

　幷せ、七八路化を慕い歸奔し、俱に五臺及び當府の地界に至り已に來りて安泊するを準る。

とみえる。この記事から「熟吐渾」「生吐渾」「渾」「葱芯」「兩突厥三部落」「沙陀」「安慶」「九府」などの大同盆地にいた諸族の名が知られ、また後文中には「沿河の黨項」「山前・山後の逸利・越利」という諸族部落の名も見え、後晉初期における代北にいた諸族の名が確認できる。彼らは契丹の壓政からのがれ、後晉の領域に移ってきたのだが、その「各本族三萬餘帳を領」すとか、あるいは「各部族の老小を領し、牛羊・車帳・甲馬を幷」せてやってきたという表現から、彼らは部族單位で遊牧生活を送っていたことがわかる。

また、「索葛府」「鷄田府」の存在した場所も、代北、すなわち雲・朔州の間であった。「索葛府」については、安從進の本貫が「索葛府」であることが確認できるが、『資治通鑑』巻二七八、明宗長興四年三月癸未條の胡注に、宋白の『續通典』を引き、「振武軍索葛府索葛村」と記している。當時の振武軍の會府は朔州であったから、索葛は朔州管内に存在したことがわかる。また、「鷄田府」の場所であるが、何君政の本貫が大同であったことから、もともとは雲州付近にあったと考えられる。「安慶」についてはさらに、『宋史』巻一八七、兵志、禁軍上、建隆以來之制、騎軍條に、

　安慶直、四つ。太原に一、潞〔州〕に三。太平興國四年、雲・朔及び河東より歸明せる安慶の民を遷し幷・潞等州に分屯せしめ、給するに土田を以てす。雍熙四年立つ。

とあることから、雲州・朔州の間に存在したことがわかる。

このように大同盆地には、五代後晉時期にいたるまで確實に遊牧生活を維持していた諸族が存在しており、安萬金や何君政、石金俊といったもともと大同盆地にいたソグド系突厥や、さらには**表1**で示したソグド系突厥も、もともとは同様に遊牧生活を維持していたと考えられる。それ故、彼らは潜在的に騎射技術を有しており、中國で興った王朝は彼らのその技術を軍事力として利用し、王朝の建國や勢力擴大に役立てたのである。

最後に、これらの代北にあったソグド系武人集團は五代以降、どうなっていったのかという問題について言及してみた

い。これらの集團は遼へ吸收されたものと、宋へ吸收されたものとが判明している。『遼史』巻三四、兵衛志上によれば、

神冊元年（九一六）、突厥・吐渾・黨項・小蕃・沙陀諸部を親征し、戶一萬五千六百を俘う。振武を攻め、勝に乘じて東し、蔚・新・武・嬀・儒五州を攻め、俘獲するもの勝げて紀すべからず、命に從わざる者を斬ること萬四千七百級たり。ことごとく代北・河曲・陰山の衆を有し、遂に山北八軍を取る。

と見え、神冊元年（九一六）に契丹は振武（朔州）へ侵攻し、大同盆地にいた突厥・吐渾・黨項・小蕃・沙陀諸部の一部を契丹の支配下に組み込んだと思われる。ただし、この時點ではソグド系突厥の集團の名は現れない。その後、大同盆地にいた諸族が契丹の直接の支配下に入ったのは、代北の地が燕雲十六州として契丹に讓渡された後のことである。この時、契丹の支配をきらった一部の沙陀やソグド系突厥の安慶などが後晉に亡命してきた事實は先に見たとおりである。

宋代になっても代北にはソグド系突厥が居住していたことが確認できる。『續資治通鑑長編』巻二〇、太宗、太平興國四年九月條に、

代州言えらく、契丹の安慶府主安海進來たりて內附せんことを求む、と。蠟書を以て之に賜う。

と見え、太平興國四年（九七九）の段階で、代北には依然として「安慶府」と稱する集團がいた。この府主が安海進というソグド姓を持っている點と、安慶が唐末以來見られたソグドと關係する集團と同一名であることから、ソグド系突厥が宋代初期にも存在していたことが明らかとなる。ちなみに、北宋へ亡命してきたこの「安慶府」集團は、その後、宋朝の禁軍に編成されたことが、先に引用した『宋史』巻一八七、丘志、禁軍上、建隆以來之制、騎軍條より明らかとなる。

さらに『元憲集』巻二八には、「賜石州安慶府都督康興進乾元節馬勅書」「賜潞州安慶府都督安美等進上尊號馬勅書」などと見え、宋代の河東に配置された安慶直が、再び安慶府と名を變え、康興や安美といったソグド姓を冠する者に統率されていたことを確認することができる。さらに『宋史』巻一八七、兵志一、禁軍上、建隆以來之制、騎軍條に、

三部落、指揮一つ。太原。太平興國四年、幽州を親征するや、雲・朔・應等州部落を幷州に遷し、因りて立つ。

とあり、太平興國四年（九七九）に太宗が幽州を親征した際、雲・朔・應州などの部落を并州に遷し「三部落」なる禁軍を編成している。これはその名稱から「沙陀三部落」と密接な關係を有するものと考えられ、宋朝は五代の歴史を動かす原動力であったソグド系突厥と沙陀の軍事力を禁軍に取り込んでいた事實が明らかとなるのである。

おわりに

本稿の考察結果は以下のようにまとめられる。（一）唐末に河東道北部で勢力を伸張した沙陀には、多くのソグド姓を持つ武人の姿を見ることができるが、彼らは貞元二年（七八六）にこの地にやってきた「六州胡」の末裔である。（二）「六州胡」とは、東突厥第一カガン國の瓦解とともに生み出された突厥遺民で、もともと東突厥に集團で從屬していたソグド人である。このソグド人は、北アジアで突厥やその他の遊牧系民族と相互に影響しあい、やがて遊牧文化を身につけ、また騎射技術を獲得し、軍事的能力を潜在的に有する存在となった。その意味において彼らをソグド系突厥と呼ぶ。（三）ソグド系突厥の代北移動後に沙陀も同じ地域へ移住した。この沙陀を中心として、代北に居住していたソグド系突厥やその他の代北に居た遊牧系諸族がまとまったのは黄巣の亂時である。この時、ソグド系突厥は薩葛（索葛・薛葛）、安慶という「部落」名で沙陀に從屬した。（四）五代時期においても代北には「部落」單位で遊牧生活を送っているソグド系突厥が存在した。これらの集團は後唐・後晉といった沙陀系王朝の必要に應じ、首長が部落民を率いて各政權に參加していた。これが、沙陀系王朝の軍事力を支えていたと考えることができる。（五）後晉がいわゆる燕雲十六州を契丹に割讓した後、これらの代北に居住していたソグド系突厥は契丹に從屬するものと、一部は雁門關を越えて南下し、後晉に亡命してきたものもあった。宋朝が成立した後も、代北から宋朝へ亡命してくるソグド系突厥があり、宋朝はこのようなソグド系突厥を禁軍に編成し、北邊・西北邊防衛のために河東の中南部に配置したのである。

註

（1）ソグド姓とは、從來の研究において「昭武九姓」の語で使用されてきたものと同意義である。それは中國へ來たソグド人がその出身オアシス都市の漢名によって名乘った獨特な漢字一字姓である。例えば、安姓はブハラ、康姓はサマルカンドのソグド人が名乘った姓で、以下、米姓はマーイムルグ、史姓はキッシュ、石姓はタシュケント、何姓はクシャーニヤ、曹姓はカブーダン、畢姓はパイカンドなどがそれに當てはまる。この他に羅姓や穆姓などをソグド姓とする場合もある。また、本稿ではソグディアナから東方へ移住し、世代を經たソグド人の後裔をソグド系と呼ぶこととする。

（2）中國へ移住してきたソグド人は、彼ら獨特の姓を名乘り、またソグド人同士で婚姻關係を結ぶなど、比較的「種」の保存を維持する傾向が見られる。蔡鴻生一九九八、程越一九九四（二四―二五頁）參照。また、漢文史料に現れるソグド姓をソグド人であると判斷する基準については森部二〇〇二（二二―二三頁）を參照されたい。

（3）現在、大同盆地と忻定盆地を隔てる山脈を恒山と呼ぶが、唐代では山脈の名稱はなかったようである。『元和郡縣圖志』卷一四、代州條に、

古幷州之域。……『史記』曰「……則趙有代・句注之北。」今按句注在州西北三十五里、雁門縣界西陘山是也。

と見え、また同書、代州、句注山條に、

句注山、一名西陘山、在縣西北三十里。

と見え、現在の恒山（山脈）を句注山、あるいは西陘山の名で呼んで差し支えない。

（4）原名は大武軍。調露二年に神武軍、天授二年に平狄軍、そして大足元年に大同軍と改稱した。

（5）この事實は桑原一九二六が簡單にふれ、その後小野川一九四二が論じ、近年にいたって徐庭雲一九九三、王義康一九九七なども指摘している。ただ、これらの先行研究は編纂史料を中心とした分析であり、既存の、あるいは中華人民共和國成立以後に發見された新出の石刻史料は利用されていない。

（6）六胡州の地理的沿革については鈕仲勳一九八四、王北辰一九九二、王義康一九九八、劉統一九九八（六三―七〇頁）參照。また、六胡州の住民については榮新江一九九九（九三―九五頁）、六胡州で起きた六州胡の反亂については、羽田一九二三、小野川一九四二、張廣達一九八六、周偉洲一九八八を參照。

（7）墓誌錄文は寧夏一九八八參照。

（8）寧夏一九八八。

（9）小野川一九四二、張廣達一九八六、周偉洲一九八八などの先行研究においても、六州胡はソグド人としている。

（10）Clauson 一九七二、三九四頁。當該語句は闕特勤碑文・東面三一行、毗伽可汗碑文・東面二四行に見える。兩碑文については小野川一九四三および Tekin 一九六八を參照。

(11) ブハラ出身のソグド人が「安息」を本貫として假託した事實については、桑原一九二六參照。
(12) 趙振華・朱亮一九八二參照。
(13) 大庭一九六一、朱雷一九八二參照。
(14) なお、同樣の概念については齊藤勝氏（清泉女子大）や中田裕子氏（龍谷大・院）によっても考えられているが、いずれも未發表である。筆者はこの情報を、本人から直接、あるいは間接に知った。
(15) ソグド姓を名乘り、明らかにソグド以外の種族を名乘る者として、史憲誠（奚、『舊唐書』卷一八一）、何建（迴鶻、『舊五代史』卷九四）が擧げられる。
(16) 羅振玉『京畿冢墓遺文』卷中（民國中、羅氏刊行）。現在、『石刻史料新編』（新文豐出版公司、一九七七）に所收。
(17) 森部一九九七、同一九九八參照。
(18) 森部一九九七參照。
(19) 沙陀の代北への移住過程は、沙陀に關して最も詳細な情報を有する『新唐書』卷二一八、沙陀傳に依據しつつ、『舊五代史』卷二五、武皇紀上および『資治通鑑』の關連記事を參照し、さらに近年公刊された李克用墓誌銘も利用する。
(20) 『舊五代史』卷二五、武皇紀上では、沙陀の始祖を拔野とするが、歐陽脩は『新唐書』沙陀傳を編集した際、この說を採用しなかった。また、沙陀は沙陀突厥ともいう。『舊唐書』卷一四、憲宗本紀、元和三年六月丁丑條に、

　丁丑、沙陀突厥七百人攜其親屬歸振武節度使范希朝、乃授其大首長曷勒河波陰山府都督。

とみえ、『舊唐書』編纂時から「沙陀突厥」の呼び名があったことが分かる。
(21) 『資治通鑑』では先天元年（七一二）一二月と開元二年（七一四）一二月に沙陀金山が入朝した記事を載せ、沙陀金山の生存が開元にまで及んでいる。
(22) 『安祿山事跡』卷中に、

　以河西・隴右節度使・西平王哥舒翰爲副元帥、領河・隴諸蕃部落奴剌・頡跌・朱耶・契苾・渾・躇林・奚結・沙陀・蓬子・處蜜・吐谷渾・恩結等一十三部落、督蕃漢兵二十一萬八千人鎭於潼關。

とある。
(23) 『資治通鑑』卷二五三、僖宗乾符五年十月條。『舊唐書』卷一九下、僖宗本紀は、この詔を乾符四年十月とする。
(24) 沙陀酋長の「李友金」、安慶酋長の「史敬存」は『舊唐書』卷一九下、僖宗本紀により補足。
(25) 『舊唐書』卷一九下、僖宗本紀、廣名元年六月條、『資治通鑑』卷二五三、僖宗廣明元年六月庚子條參照。この前々年の乾符五年十月に李克用討伐の詔が下されたとき、沙陀酋長の李友金、安慶酋長の史敬存、薩葛酋長の米海萬は唐朝側にいたが、廣明元年の時點では、李克用とともに唐朝へ歸順している。この二年間のいつ、沙陀・安慶・薩葛が李克用に從屬したのか、現存する記錄からはよくわからない。あるいは、唐末の混亂により、『舊唐書』『舊五代史』『新唐書』『新五代史』を編纂する際に誤った情報を記

した可能性もある。すなわち、沙陀・安慶・薩葛は一貫して唐朝側についていたか、一貫して李克用に從屬していたかであろう。

(26) 『舊唐書』では「翟稽」、『舊五代史』では「瞿正」とする。

(27) 『資治通鑑』巻二五四、僖宗中和元年二月條。絳州に至った陳景思の軍は、『舊唐書』巻一九下、僖宗本紀、中和元年二月條では、

代州北面行營都監押陳景思率沙陀・薩葛・安慶等三部落與吐渾之衆三萬赴援關中、次絳州。沙陀首領翟稽（瞿稹）俘掠絳州叛還、景思知不可用。

と見え、また『新唐書』巻二一八、沙陀傳にも、

〔陳〕景思聞天子西、乃與〔李〕友金料騎五千入居絳、兵擅劫帑自私。

とあり、絳州で略奪行爲を働いた上で代北へ戻ったと記す。

(28) 『舊唐書』巻一九下、廣明元年六月條に、

六月、代北行營招討使李琢・幽州節度使李可舉・吐渾首領赫連鐸等軍討李克用於雲州。時克用令其大將軍傅文達守蔚州、高文集守朔州。吐渾赫連鐸遣人說高文集令歸國、文集與沙陀首領李友金・薩葛都督米海萬・安慶都督史敬存以前蔚州歸款於李琢。

と記され、同一の記事に關して『舊五代史』巻二五、武皇紀上、廣明元年春條では、

廣明元年春、天子復命元帥李涿、率兵數萬屯代州。武皇令軍使傅文達起兵於蔚州、朔州刺史高文集與薛葛・安慶等部將、縛文達送於李涿。

と見える。「索葛」は安從進の本貫として現れる語である（『新五代史』巻五一、安從進傳）。この三語の編纂史料における使用例については、森部二〇〇一（五六頁）參照。

(29) 「晉故均州刺史光祿大夫檢校司徒兼御史大夫上柱國開國男食邑三百戶安府君墓誌」。森部二〇〇一（二一―三〇頁）參照。また、墓誌銘拓本寫眞は『洛陽出土歷代墓誌輯繩』（中國社會科學出版社、一九九一年、七二四頁）および『隋唐五代墓誌匯編』洛陽巻一五（天津古籍出版社、一九九一年、一四八頁）に所收。

(30) 「大晉洛京故陳留縣君何氏墓志銘文幷序」。森部二〇〇一（三〇―四三頁）參照。また、墓誌銘拓本寫眞は『洛陽出土歷代墓誌輯繩』（中國社會科學出版社、一九九一年、七二五頁）および『隋唐五代墓誌匯編』洛陽巻一五（天津古籍出版社、一九九一年、一四九頁）に所收。

(31) 「大晉故鷄田府部落長史何公墓誌銘幷序」。森部二〇〇一（四三―五六頁）參照。また、墓誌銘拓本寫眞は『隋唐五代墓誌匯編』山西巻（天津古籍出版社、一九九一年、一八二頁）に所收。

(32) 『新唐書』巻四三下、地理志參照。

(33) 「大周故北京飛勝五軍都指揮使銀青光祿大夫檢校司空兼御史大夫上柱國贈左驍衛將軍石公（金俊）妻河南軍太夫人元氏墓誌銘幷序」（『千唐誌齋藏誌』、文物出版社、一九八四、一二三五頁）。

〔附記〕本稿は平成十四年度東洋史研究會大會（京大會館）での口頭發表の原稿を補訂したものである。大會發表終了後、毛利英介氏（京都大學大學院博士課程）から、『元憲集』に見える安慶に關する情報を教示いただいた。ここに謝意を申し上げます。

文獻目錄

一　日文（五十音順）

石見　清裕　二〇〇〇：「唐代「沙陀公夫人阿史那氏墓誌」譯註・考察」『村山吉廣敎授古稀記念中國古典學論集』、汲古書院、三六一―三八二頁。

大庭　脩　一九六一：「敦煌發見の張君義文書について」→『唐告身と日本古代の位階制』、學校法人皇學館出版部、二〇〇三、一二九―二四九頁。

岡崎　精郎　一九四五：「後唐明宗と舊習（上）」『東洋史研究』九―四、五〇―六二頁。

―　一九四八：「後唐明宗と舊習（下）」『東洋史研究』一〇―二、二九―四〇頁

―　一九五一：「チュルク族の始祖傳說について――沙陀朱耶氏の場合――」『史林』三四―三、四〇―五三頁。

小野川秀美　一九四二：「河曲六胡州の沿革」『東亞人文學報』一―四、九五七―九九〇頁。

―　一九四三：「突厥碑文譯註」『滿蒙史論叢』四、二四九―四二五頁。

桑原　隲藏　一九二六：「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」→『桑原隲藏全集』二、岩波書店、一九八六、二七〇―三六〇頁。

羽田　亨　一九二三：「漠北の地と康國人」→『羽田博士史學論文集』上・歷史篇、東洋史研究會、一九五七、三九五―四〇五頁。

室永　芳三　一九七一a：「唐代の代北の李氏について――沙陀部族考その三――」『有明工業高等專門學校紀要』七、三（四）―七六（一）頁。

―　一九七一b：「唐代における沙陀部族の成立――沙陀部族考その一――」『有明工業高等專門學校紀要』八、一七（四）―一二〇（一）頁。

―　一九七四：「吐魯番發見朱耶部落文書について――沙陀部族考その一（補遺）――」『有明工業高等專門學校紀要』一〇、六（七）―一〇二（一）頁。

―　一九七五：「唐代における沙陀部族の擡頭――沙陀部族考その二――」『有明工業高等專門學校紀要』一一、三四（三

一）―一三八（二七）頁。
護　雅夫　一九六五：「東突厥國家內部におけるソグド人」→『古代トルコ民族史研究』I、山川出版社、六一―九三頁。
森部　豐　一九九七：「魏博節度使何弘敬墓誌銘試釋」『吉田寅先生古稀記念アジア史論集』、吉田寅先生古稀記念論文集編集委員會、一二五―一四七頁。
――　二〇〇一：「後晉安萬金・何氏夫妻墓誌銘および何君政墓誌銘」『內陸アジア言語の研究』一六、一―六九頁。
――　二〇〇二：「唐代河北地域におけるソグド系住民」『史境』四五、二〇―三七頁。
森部豐・石見清裕　二〇〇三：「唐末沙陀李克用墓誌譯注・考察」『內陸アジア言語の研究』一八、一七―五二頁。

一　中文（ピンイン順）
蔡　鴻生　一九九八：『唐代九姓胡與突厥文化』、中華書局。
蔡　家藝　二〇〇一：「沙陀族歷史雜探」『民族研究』二〇〇一―一、七一―八〇頁。
程　越　一九九四：「從石刻史料看入華粟特人的漢化」『史學月刊』一九九四―一、一二―二七頁。
樊　文禮　一九九七：「關於沙陀內遷的幾個問題」『烟臺師範學院學報（哲社版）』一九九七―四、三八―四二頁。
――　二〇〇〇：『唐末五代的代北集團』、中國文聯出版社。
――　二〇〇二：「試論唐末五代代北集團的形成」『民族研究』二〇〇二―二、五四―六二頁。
傅　樂成　一九六五：「沙陀之漢化」『漢唐史論集』、聯經出版事業公司、一九七七、三一九―三三八頁。
劉　統　一九九八：『唐代羈縻府州研究』、西北大學出版社。
寧夏回族自治區博物館　一九八八：「寧夏鹽池唐墓發掘簡報」『文物』一九八八―九、四三―五六頁。
鈕　仲勳　一九八四：「六胡州初探」『西北史地』一九八四―四、六九―七二頁。
榮　新江　一九九九：『中古中國與外來文明』、生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇一。
森部　豐　一九九八：「略論唐代靈州和河北」『漢唐長安與黃土高原』、陝西師範大學中國歷史地理研究所、二五八―二六五頁。
王　北辰　一九九二：『王北辰西北歷史地理論文集』、學苑出版社、二〇〇〇。
王　義康　一九九五：「沙陀漢化問題再評價」『陝西師範大學學報』一九九五―四。
――　一九九七：「後唐、後晉、後漢王朝的昭武九姓胡」『西北民族研究』一九九七―二、一〇六―一一三頁。
――　一九九八：「六胡州的變遷與六州的種族」『中國歷史地理論叢』一九九八―四、一四九―一五六頁。

徐　庭雲　一九八七：「晩唐五代時期的沙陀」『中央民族學院學報』一九八七―一、一四―一七頁。
――　一九九三：「沙陀與昭武九姓」『慶祝王鍾翰先生八十壽辰論文集』、遼寧大學出版社、三三五―三四六頁。
張　廣達　一九八六：「唐代六胡州等地的昭武九姓」『西域史地叢稿初編』、上海古籍出版社、一九九五、二四九―二七九頁。
趙振華・朱亮　一九八二：「安菩墓誌初探」『中原文物』一九八二―三、三七―四〇頁。
周　偉洲　一九八八：「唐代六胡州與〝康待賓之亂〟」『民族研究』一九八八―三、五四―六三頁。
朱　雷　一九八二：「跋敦煌所出《唐景雲二年張君義勳告》」『中國古代史論叢』一九八二―三、三二一―三四九頁。

三　歐文

Clauson, G. 1972: *An Etymological Dictionary of the Pre-Thirteenth-Century Turkish*, Oxford.
Pulleyblank, E.G. 1952: "A Sogdian Colony in Inner Mongolia." *T'oung Pao*, 41, pp.317-356.
Tekin, T. 1968: *A Grammar of Orkhon Turkic*. (Uralic and Altaic Series 69), Bloomington, The Hague.
De La Vaissière, É. 2002: *Histoire des Marchands Sogdiens*, Collège de France.
Yang Lien-sheng 1947: "A "Posthumous Letter" from the Chin Emperor to the Khitan Emperor in 942." *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 6-10, pp.418-428.

rally occurring settlements or a pre-existing social organizations.

THE SOGDIAN TURKS AND SHATUO IN DAIBEI DURING THE LATE TANG AND FIVE DYNASTIES PERIODS

MORIBE Yutaka

This article argues the causes of the extension of the power of the Shatuo 沙陀 who eventually established the Later Tang regime of the Five Dynasties, through an analysis of the Sogdian Turks who were active in northern China from the second half of the Tang Dynasty. The Shatuo, who settled in the northern portion of Hedong 河東 after leaving Gansu 甘肅 and crossing the Ordos early in the ninth century, were not a particularly powerful group at the time. However, with the rebellion of Huang Chao 黄巣 at the close of the Tang, the Shatuo rapidly extended their power. It has been noted that one of the causes behind the expansion was the absorption of many warriors with Sogdian names. These Sogdian warriors were the descendants of Liuzhou-Hu 六州胡, who had immigrated to Daibei 代北 in the second year of the Zhenyuan 貞元 era (786). The Liuzhou-Hu were a remnant of the Turkic people, who had been created out of the collapse of the first Eastern Turkish khanate. They were originally a Sogdian people who had submitted collectively to the Eastern Turks. Under the mutual influence of the Turks and other nomadic peoples of northern Asia, they adopted nomadic culture, acquired the techniques of equestrian archery and became a potential military force. It is in this sense that they are referred to as Sogdian Turks in this article. The Sogdian Turks appeared in Daibei in nomadic settlements called Sage 薩葛 (Suoge 索葛 and Xuege 薛葛), Anqing 安慶, Jitian 鷄田, and they lived a communal nomadic existence in the Five Dynasties period. These groups responded to needs of the Shatuo dynasties such as the Later Tang 後唐 and Later Jin 後晉 by participating in the regimes as a communal group led by a chieftain. It may be surmised that they sustained the military power of the Shatuo dynasties. After the Later Jin ceded what is known as the sixteen prefectures of Yanyun 燕雲十六州 to the Khitai契丹, the Sogdian Turks living in the Daibei submitted to the Khitai, while others of them moved south and passed through the Yanmen 雁門 barrier seeking asylum within the Later Jin state. Following the establishment of the Song 宋 dynasty, there were also some Sogdian Turks who left Daibei seeking asylum with the Song. The Song organized these Sogdian Turks into royal guard units

that were stationed in the central portion of southern Hedong as a defense against the Xixia西夏 and the Khitai.

DISINTEGRATION FROM THE PERIPHERY: HILL PEOPLES AND THE QING ANNEXATION OF SIPSONG PANNA IN 1729

Christian DANIELS

During the 1720s the Qing began to actively assert more bureaucratic control over Southern Yunnan by replacing some smaller Tai (Dai) polities with regular imperial officials. Even the large polity of Sipsong Panna, which had remained relatively free from serious interference in its internal affairs by the Chinese state so far, did not get off unscathed. In 1729 E'ertai, the governor-general of Yunnan and Guizhou, annexed the six panna on the east bank of the Mekong river, transferring them to the control of imperial bureaucrats. Sipsong Panna had been a vassal of both the Burmese and the Chinese courts since the 16th century, and this action by the Qing ended up orientating the polity more strongly than ever before towards China. Though the Qing found it difficult to administer the annexed territory through normal means, and had to leave most of it under the jurisdiction of Tai rulers, this event deserves attention for it launched the polity off on a path towards full absorption into the Chinese state, a long journey that did not end until the 1950s. Why did the Qing annex a part of Sipsong Panna territory? In this article I use memorials written by contemporary Qing administrators, who furnished detailed reports on local conditions, to put the events of the 1720s in the long term perspective of violence by ethnic hill peoples living in the area to the north of Sipsong Panna that had continued since the 17th century. I show that inter-ethnic strife between hill peoples and Han traders in the Tea Hills, an area under the jurisdiction of the paramount leader of Sipsong Panna, precipitated the rebellion which ultimately led to the annexation, and I argue that the Qing intervened in order to enforce Chinese style law and order on local society rather than for territorial aggrandisement as some scholars have claimed. Han traders had introduced a money economy into the hill areas by their tea buying activities, usury and other associated malpractices which drove the Woni (Hani) and other ethnic groups to rebel in 1727. The hill peoples were vassals of the Tai rulers, and though the increase in trade exchange had brought great hardship to them, their overlords, the Tai rulers, had proved ineffective as articulators, and had failed to protect them